



「日刀保たたら」における技術伝承と後継者育成

黒 滝 哲 哉

本稿の課題は、わが国の文化財保存分野における「文化財保存後継者育成学」といった学問の確立の為の礎を築くことにある。

近代日本の拙速な国民国家形成のいわば犠牲的存在に、文化財保存技術と技能の伝承をあげることができよう。この結果、わが国は文化財保存の面でも狭隘な単純経験再生産論が、その主流を占めてしまい、いわば理論としての、科学としての、「文化財保存後継者育成学」といった学問が形成されてこなかった。そこで、財団法人日本美術刀剣保存協会が運営する「日刀保たたら」を題材にし、文化財保存の後継者育成の現場の報告を行い、そこから派生する問題点、将来展望などを述べ、そしてこの理論化へのささやかな提言を行いたい。

キーワード：日刀保たたら、選定保存技術、たたら製鉄、文化財保存、後継者育成、意識改革

1. はじめに —以心伝心から理論へ—

わが国は「近代化」という幻想のもと、明治国家を見切り発車させてしまい、そして拙速に「国民国家」を形成させた。そして大陸への野望を極めて拙速に遂げるため、稚拙な行為へと突き進み、そして自壊してしまう。

この傾向はいわゆる戦後も終らず、高度経済成長という美名のもと「経済大国」という空虚な自己独善信仰に、これまた自己陶醉し、そして再度崩壊してしまう。空虚な自己独善信仰は、見事なまでに「あぶく」つまりバブルだったのである。これが後年「失われた10年」に比喻され、かつて日露戦争後に石川啄木が嘆いた「時代閉塞の現状」がここに再現出されたといえよう。

しかしながら、こういった閉塞感に苛まれ、蝕まれているだけでは更なる閉塞感が待ち受けているだけであり、生産的ではない。そこでこれを打破する動きが表面化してきた。それが生産事業における原点回帰運動やそれを支える思想動向である。たとえば創業者や発明者の事跡回顧および根本思想の研究、これを根底にした次なる方向性の模索とその定立などである。そのなかで、日本・日本人の自信を取り戻し、また自分自身の自信をも取り戻し、その自信の中から新たな原動力を見出すという方向性であろう。

近年この動向を背景に、モノづくりという行為とその価値への急速なる見直しという動向が発生した。こ

の動向が、メディアを通じての様々な啓蒙・啓発や「ものづくり大学」の開校などへと結実したとはいえないか。

たとえば町工場の技術に焦点があてられ、その細密な技術が世界の技術を牽引するといった現実や、また世界市場を席卷した日本独自の工業技術の原点を探求し、それが映画になったりあるいは書籍としてまたは番組として、一定の支持を得るといった構図は、上述の動向を背景としているといつてよいのではないだろうか。

もちろんこのような動きは歓迎すべき点多々あれども、根底に潜む問題点を伶俐に腑分けしておかなければ、将来へ建設的理論を提供することもこれまた困難である。「モノづくり」は決してロマンではない。そして掛け声だけで目標が成就するわけでは決してないのである。

つまりは「モノづくり」に携わる上で、確実にして順調な技能伝承を如何にどう行うかという問題がここで浮上してくるのである。技能伝承は、これまでは徒弟制度的なあり方のなかで、以心伝心や当意即妙的な思考枠組みの中で行われてきた。「見て覚えろ」や「技術は盗むもの」といった方法論である。もちろんこの方法論も決して否定はできない。この方法論による後継者育成にこそ、技術者の深遠なる真理が含まれることもまた一面では真実である。少なくともこれまでは、この考え方や方法論で後継者育成は行われてきた。それが日本の文化の一端を形成し、そして先述した瞠目すべき経済発展の礎となったこともまた然りである。つ

まり、以心伝心的後継者育成法は、モノづくりの面で重要な真理を持つこともこれまた事実なのである。

一方で、すでにこの方法論が破綻を見せはじめているのもまた冷厳な事実であり、これがモノづくりの面での、後継者の恒久的にして順調な供給および再生産上の桎梏となっていることも、冷酷な現実であろう。つまり「今まではこうだった」「むかしからこうやってきた」「自分はこうだったんだから、これでなくてはいけない」などといった「根性論・気合論・単純狹隘経験強制論」では恒久的にして確実な人材育成は不可能であるといえよう。「最近の若い者はダメだ」「最近の若い者は辛抱が足りない」「自分の若いころはもっとしっかりしていた」などといったエジプトのパピルス文書に記載されている6000年前の老人の繰言を、21世紀になって発しているもなら根本的解決に貢献しないのである。これでは人類は少なくとも6000年あるいはそれ以上もの長い間、なら進歩していないことになってしまう。(ただ若者のダメな理由が、それを指導する大人の自堕落かつ無責任さに根本原因があることを指摘した大人自身からの文書は、6000年たっても現れてはいないようではある。残念ながらたぶん今後とも現れ得ないだろう。) 第一、このような前提では後継者理論は学問としても科学としても自立し得ない。

つまりは後継者育成の方法とあり方を、一定のレトリックに体系化することの必要性が今まさに問われているといえよう。可及的速やかに後継者育成の理論化を行い、これを一定の学問体系あるいは科学へと昇華させることの必要性が浮かび上がってきたのではあるまいか。

そう、つまり、「文化財保存後継者育成学」の構築である。

これを前提に、「文化財保存後継者育成」の観点から、たたらを通じての後継者育成の現場状況を報告したい。そしてその現状報告をもととして、新たな後継者育成の理論を構築する上での礎となれば望外の喜びである。

2. 日刀保たたら操業の様子

(1) 操業の具体相

たたらは通常以下のように定義される。

(一操業ごとに)粘土で築いた炉に原料を砂鉄とし、燃料に木炭を用い、送風動力に鞴を使用して、極めて純度の高い鉄類を生産する日本古来の製鉄技術のこと^{a)}

^{a)} 鈴木卓夫『日本刀とたたら製鉄の科学』(90年 雄山閣)の記述を一部改変。

ではこのようにして定義付けられるたたらは、今現在いかなる形態で運営・運用がなされているのであろうか。これを以下に略述しておこう。

(a) 1年のタイムテーブル

1月から2月	操業(2週間から3週間)
2月後半から5月	鋼造り 完成した鉤を破碎し刀匠へ頒布の準備
6月から	頒布
この間秋まで	村下(技師長)は、粘土・砂鉄の選別 たたら用の木炭の生産
秋ころ	翌年の操業準備開始
1月半ば	火入式

このようにたたら自体を操業し、そして実際に鉄を生産するのは冬季の数週間である。しかしたたら全体の仕事は通年で行われ、とくに村下はたたらへの成否を大きく左右する粘土や砂鉄の選択に余念がない。

(b) 1週間の操業のタイムテーブル

たたらは1週間で1回の操業として数える。これを「代」(よ)とよび、1回目の操業を「1代」(ひとよ、いちよ)、2回目を「2代」(によ、ふたよ)といっている。この操業のあらまは以下ようになる。

初日 床締め

炉床で薪を焚き、これを何回も繰り返し、熾きを作り、カーボンベッドとする。これによって炉床には熾きが蓄積され一定の厚さとなり、一定の熱をもつこととなる。

2日目 床締めと釜構築の準備

この日も前日から引き続いて熾きを作る作業が待っている。そしていよいよ釜を構築することとなる。釜の構築には3段階があり、鉄を作るうえで最も重要にして基礎的な要素となる「元釜」から始まり、「中釜」「上釜」へと推移する。この際には、粘土をレンガ大ほどの大きさに加工してこれを積み重ねていく。こうすることで、釜を壊す際に容易になるようにしているのである。

3日目 火入

いよいよ完成した炉に火を入れ、操業が本格的に開始される。毎年第1代目の操業時には、地元奥出雲の町長や靖国神社の関係者など参列の下、「火入式」を行う。そしてたたら製鉄の神様である「金屋子神社」に操業の無事を祈念し、その年最初の砂鉄である「初種」を装入する。こうしてたたら操業は始まる。

初日は「籠り」から「籠り次」といわれ、まだ鉬も小さく生育も十分ではない。

4日目 火を入れてから2日目からは「上り」といわれいよいよ炉内反応も盛んになり、鉬も成長をし始める。しかし村下および養成員は、30分毎の砂鉄および木炭の装入のみならず、炎の上がり方や炉内での反応時の音などに気を配らなければならない。一瞬たりとも気を抜くことは出来ないのである。

5日目 いよいよ操業も大詰めを迎える。「下り」と呼ばれる時期に入り、炉内反応もいっそう盛んになる。ノロもほぼ間断なく排出される。鉬も炉の幅一杯に育ち、炎も3寸ほどにまで舞い上がる。

6日目 この日の早朝に70時間にわたった操業も終わりを告げる。「釜崩し」と「鉬出し」という一連のたたら操業のクライマックスが訪れるのである。早朝5時頃になり、最後の砂鉄が装入される。

村下は静に炎の様子と炭の残り具合を見計らい、送風停止を指示すると、釜崩しがいよいよ始まることとなる。村下と養成員は所定の持ち場にそれぞれ散り、大カマと呼ばれる独特の道具を用いて、村下の掛け声を待つ。村下はころあいを見て掛け声をかけ、釜崩しは始まる。炉は場所によっては粘土が固く焼かれて縮まっており、なかなか崩すことは出来ない。しかし、村下の合図と養成員の和によって瞬く間に炉は崩され、そして灼熱の炉壁の塊が排出される。このとき、築炉の際にレンガ大の大きさに粘土を固めて、釜を築いた成果が現れることとなる。炉壁は意外に細かく壊れており、このため作業はしやすくなっている。

こうして苦心惨憺の末、炉の深くに眠っていた鉬は地表に出される事となった。この後2時間ほど放冷し、鉬出しという工程へと移ることとなる。これは鉬をクレーンで吊り上げ、この下に木のコロをかまし、鉬をそろそろと引き出す工程をいう。鉬の端の下の地面を少し掘り返し、ここに鉄で出来た爪をかませ、クレーンで引き上げるのである。こうして鉬は所定の場所に引き出され、細かく破壊されるのを待つこととなるのである。

このような手順を経て、一連の狭い意味でのたたら操業は終わりを告げる。

3. 選定保存技術と「日刀保たたら」の後継者育成方法

(1) 選定保存技術

「日刀保たたら」での後継者育成を説明する前に、選定保存技術の説明をする必要がある。なぜならば、「日刀保たたら」後継者育成は、この選定保存技術制度下での育成事業としての位置づけがなされているからである。選定保存技術とは「文化財保護法」第83条7項の規定によって設けられた制度である。現在はこの制度のもと日刀保たたらは国庫補助事業として補助金を受け、日々村下の後継者を育成しているのである。

(2) 「日刀保たたら」での後継者育成

このような形態で運営される日刀保たたらでの後継者育成はいかなる具体的方法で行われているのであろうか。それを以下に紹介していきたい。

たたらは先述したようなタイムテーブルで操業されているため、実技研修と教養講座から構成されている後継者育成の諸事業は、勢いその操業を中心とした時期に集中する。

実技研修はまさしくたたら操業そのものである。毎年1週間を1単位とする操業を2から3回行うことは先述した。この操業自体を「国庫補助事業村下養成研修会」として位置づけ、木原村下を主任講師、渡部村下を講師として委嘱する。そして操業に当たる操業員を経験年数と技量によって「上級養成員・中級養成員・初級養成員」として位置づけ、村下の後継者としての地位を明確にして毎年これを行うのである。現在は11名が村下の後継者として位置づけられ、国庫補助事業としての研修会形式のなかで育成されている。

またこういった実技研修だけでは不十分であり、教養知識の面での研修も当然行わなければならない。そこで外部に鉄関係の専門家の講義講師を委嘱し、これを行っている。

4. 後継者育成の問題点

さて上述したような経緯と方法で今現在の日刀保たたらの操業は行われ、そして後継者育成は進行している。しかしながら、前途洋洋・順風満帆といった将来展望があるわけではもちろんない。むしろ、暗中模索・五里霧中といったところが当を得ていよう。

ここでは日刀保たたらが抱える問題点を指摘し、検討課題として俎上にのせてみたい。

(1) 人材の供給と需要のバランス

日刀保たたらは、近年、様々な方面から注目されこの仕事に携わりたいという希望者が増えてきた。しかし、この養成員は原則兼職であり、ほかに生業を持ち生活の資はそれによってまかなっているのが現状である。具体的には日立金属株式会社関係から期間中業務命令でたたら操業に従事するもの、また刀匠として期間中従事するものに大別される。

しかしながら、養成員専業としては困難であっても、後継者の恒常的再生産は常に担保されていなければならないわけで、この点を念頭におかなければならない。

(2) 材料供給

たたらは縷々述べてきたとおり、材料に砂鉄と木炭を使用する。この使用量は1回つまり1週間の操業で砂鉄を約10トン、木炭を約12トンほど使用する。(ちなみに築炉用の粘土は約4トン)当然、これの供給は大きな課題である。砂鉄に関しては、相当量を必要とするため、質量ともに確保することが年々困難となっている。とくに日刀保たたらの場合は、真砂(まさ)砂鉄という砂鉄を使用するため、当然「質」が求められる。まずはこの確保に専心せねばならない。

また木炭もたたらの場合は「たたら炭」といい、特殊なものを使う。これは中が生木であり、この方が火力が上がるため、わざわざ生木のままで炭にするのである。現在、このたたら炭を焼く技術者が完全に不足しており、これを解決せねばならない。日刀保たたらの敷地内に炭焼き釜を作り、養成員の何人かにこの技術を伝えるべく、今現在技術伝承を行っている。いずれにしても喫緊の課題として木炭の問題は不可避である。

5. おわりに — 「文化財保存後継者育成学」への接近—

それではこのような方法で運営され、後継者育成がなされている「日刀保たたら」の日常から、冒頭で指

摘した「文化財保存後継者育成学」への接近を図りたい。

まず行論中にもあったように「日刀保たたら」は「選定保存技術」としての社会的責任があることを十分にふまえ、後継者育成は社会的使命を強く帯びた性格を持つことを再認識する必要がある。まさに、「根性論・気合論・単純狭隘経験強制論」などを情念的前提として後継者育成などしてはならないのである。また、育成される側も強力な使命感を持って「育成される」ことに社会的意義を認識する必要がある。具体的に言えば育成する側もされる側も、単なる名誉や金銭などの低レベルの目標を追うことが、いかに「文化財保存後継者育成」にとり有害であるかという「意識改革」が必要となろう。

さらには、「秘伝」の禁止をあげておきたい。これも冒頭の趣旨から敷衍できることであり、技術の革新的事柄は必ず後継者に継承し、これを明文化し、そして後継者全員にあまねく行き渡るようにすること。ただ広く社会一般にまでとなると一定の制限は設ける必要がある。いずれにせよ、情報を関係者が共有することで「理論化」「学問化」が可能になり、「文化財保存後継者育成学」へと一歩近づくこととなるのである。

日刀保たたらというこの貴重な技術を後世へと伝え、そしてその重要性を社会一般に知らしめることは、今現在これを選定保存技術として認定され、その保存団体として位置づけられる財団法人日本美術刀剣保存協会の重要な責務そして責任である。この責務・責任をさらに真摯に受け止め、この世界的にもまれな貴重な文化財を守り続けていくことを強調して、本稿を終えたい。

JCMA

【筆者紹介】

黒滝 哲哉 (くろたき てつや)
財団法人日本美術刀剣保存協会たたら課主任
刀剣博物館学芸員

